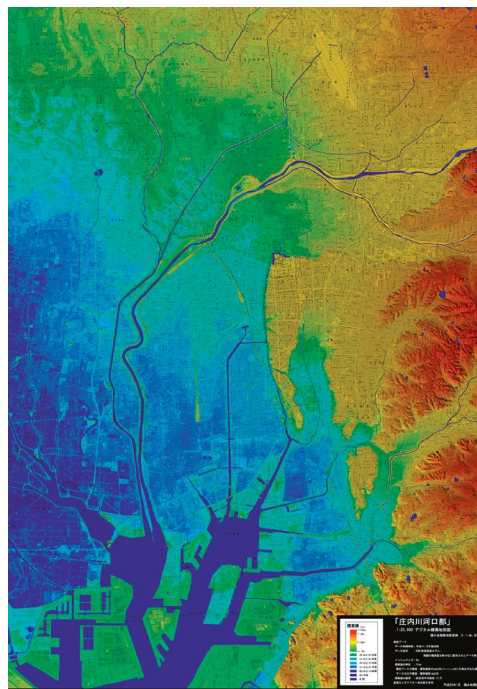


第1 南区の概況

1 位置・地勢

- ・南区は名古屋市の南東部に位置し、西から堀川・山崎川・天白川の三河川に挟まれた立地となっています。(図 2.1)
- ・北は瑞穂区・熱田区に、東は緑区・天白区に、西は港区に、南は東海市に接し、区域は 18.46 平方キロメートルとなっています。
- ・区の北東部は笠寺台地にあたり、台地上には古くからの人々の暮らしがうかがえる痕跡が残っています。
- ・南部から西部にかけては、浅い海を干拓してできた低地が広がっています。
- ・区内には、南北に走る名古屋高速道路 3 号大高線や、国道 1 号や国道 23 号などの主要幹線道路が通り、人や物の移動を支えています。
- ・JR や名鉄、地下鉄の路線が通り、市バスとともに、利便性の高い公共交通網を形成しています。

図 2.1 デジタル標高地形図



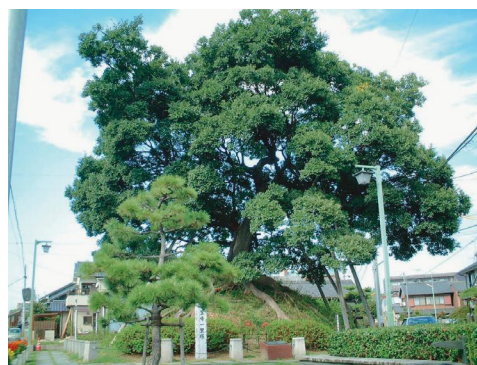
出典) 国土地理院ウェブサイト

2 なりたち

1 古代から近世へ

- ・縄文時代の海面上昇により、南区の大部分は海の底であったといわれています。
- ・南区では、縄文時代から弥生時代にかけての遺構や遺跡が各所で確認されています。
- ・特に、笠寺台地上にある見晴台遺跡は、村のまわりに大きな溝を巡らした環濠集落として有名です。
- ・古代、南区西側の低地は浅い海で伊勢湾とつながり、「万葉集」で歌われた景勝地「あゆち潟」の有力候補地といわれています。
- ・中世末期から近世初頭にかけて、製塩がさかんに行われ、この塩は「前浜塩」と呼ばれていました。
- ・江戸時代後期以降は、浅い海の干拓による新田開発が進み、製塩は衰退していきました。
- ・江戸時代には、熱田宮の宿から鳴海宿に至る東海道が南区を通り、沿道の村々が街道とともに発達していきます。(図 2.2)

図 2.2 笠寺一里塚



2 南区の誕生

- ・明治 22 年に市制が施行され名古屋市が誕生し、同 41 年には、南区をはじめ、東、西、中の 4 区が創設されましたが、当時の南区の区域は、現在と異なり、現在の熱田区、港区の区域を中心とした広大な区域でした。
- ・その後、大正 10 年に呼続町や笠寺村が南区に編入され、現在の南区の基盤となります。
- ・大正 10 年ころまで、区域の西部は広大な水田が広がっており、名古屋の都市部に農産物を供給する農業地帯でした。
- ・大正から昭和にかけて、商工業の発展とともに、水田地帯が工業地帯に変貌していきます。
- ・大正期には、綿花の栽培を背景にした紡織業や貯木場の立地を生かした製材業などの軽工業を中心に発展していきました。
- ・昭和に入ると、軍需産業の中心となった重工業が南部臨海工業地帯を形成し、急発展していきます。

3 復興から発展へ

- ・第 2 次世界大戦中、多くの軍需工場を抱える南区も空襲の標的となり、空襲による死者は 354 人という記録が残っています。
- ・昭和 34 年 9 月 26 日、東海三県を襲った伊勢湾台風（台風 15 号）は、名古屋市に大きな被害をもたらし、特に、南区では、高潮によって流された名古屋港の貯木場の木材が住宅地を襲い、死者・行方不明者 1,417 人という甚大な被害をもたらしました。（図 2.3）
- ・戦後から、鉄鋼・金属・機械・化学などの工場が立ちならぶ、市内有数の工業地帯として発展しました。
- ・昭和 30 年以降の高度経済成長の中で、昭和 44 年には南区の人口が 191,804 人となり、昭和 12 年以降で最も人口の多い時期を迎えました。
- ・昭和 40 年代以降、立地条件の悪化や環境汚染問題を理由に、名古屋市の中・大規模の工場の移転・操業停止が始まり、南区でも同様の傾向が見られました。
- ・平成に入ると、名古屋市総合体育館や南区役所の整備、地下鉄桜通線今池・野並間の開通など、南区のまちづくりが進められ、平成 20 年 4 月 1 日に区制 100 周年、平成 30 年 4 月 1 日に区制 110 周年の節目の年を迎えました。

図 2.3 伊勢湾台風で被災した旧白水小学校分校
（現在の柴田小学校）



提供）小川金雄氏

図 2.4 南区役所庁舎



第2 南区を取り巻く状況と課題

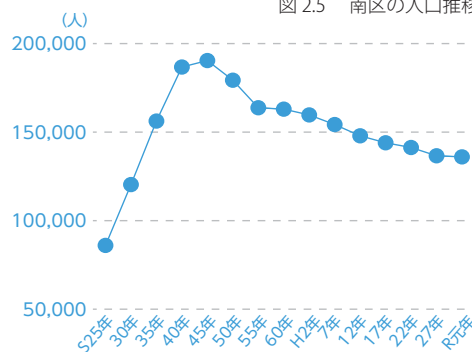
1 人口・社会構造の変化

- ・ 南区には、令和元年10月1日現在で、63,814世帯、136,015人が暮らしており、これは市内で10番目に多い人口です。
- ・ 昭和40年台をピークに人口の長期減少傾向が続き、令和元年は昭和32年頃の人口規模に近いものとなっています。（図2.5）
- ・ 65歳以上の高齢者は、40,144人、区の人口の29.7%と市内で最も高い割合となっています。
- ・ 一方、15歳未満の人口は、14,501人、10.7%と市内で4番目に少ない割合となっています。
- ・ 自然動態は、出生数が減少傾向で、死亡数が増加傾向で推移しているため、自然減が続いています。（図2.6）
- ・ 一方、社会動態は、転出数が転入数を上回る社会減が続いていましたが、平成28年からの4年間は社会増に転じています。
- ・ 令和4年以降、いわゆる「団塊の世代」が75歳以上の後期高齢者になるなど、高齢化が一段と進行し、南区においても、今後、人口減少や高齢化がますます進むものと予測されます。（図2.7）
- ・ 少子化・高齢化に伴う人口構造の変化のもとで、要介護状態や認知症の人など支援を必要とする高齢者の増加が見込まれます。
- ・ 社会の担い手の負担が増加するとともに、生産年齢人口（15歳～64歳）の減少に伴う、活力の低下が懸念されます。

課 題

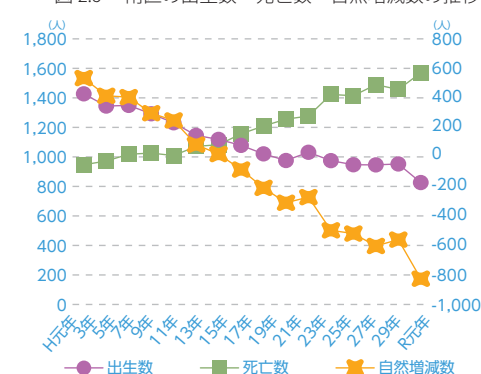
意欲のある高齢者が活動、活躍できる場づくりや、安心して子どもを生み育てることができる環境づくりなどにより、地域の担い手を増やし、幅広い世代で支え合える社会をつくる必要があります。

図 2.5 南区の人口推移



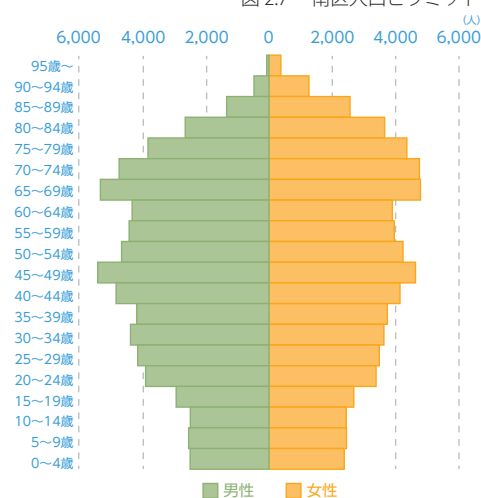
出典) 統計名古屋 web 版より作成

図 2.6 南区の出生数・死亡数・自然増減数の推移



出典) 統計名古屋 web 版、名古屋の人口・20年のあゆみより作成

図 2.7 南区人口ピラミッド



出典) 統計名古屋 web 版より作成 (令和元年10月)

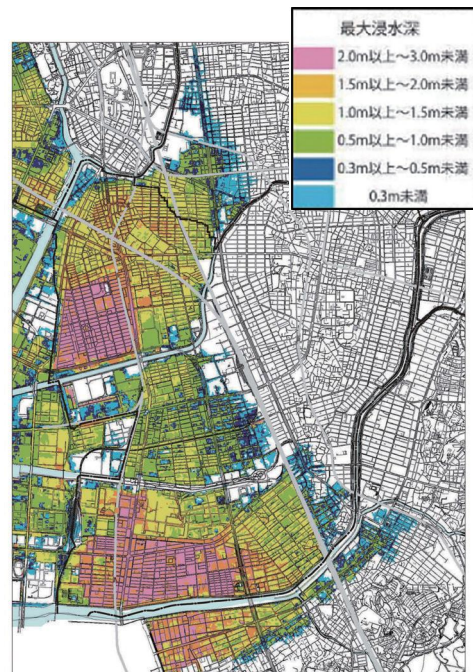
2 自然災害に対する懸念

- ・駿河湾以西の太平洋岸の沖合にある南海トラフを震源とする大規模な地震（南海トラフ巨大地震）の発生確率が、今後 30 年間で 70 ～ 80% と予想されています。
- ・南区における、あらゆる可能性を考慮した最大クラスの被害想定は、最大震度 7、死者数約 1,400 人と推計されています。（図 2.8）
- ・風水害については、昭和 34 年に東海地方を襲った伊勢湾台風が、南区に大きな被害をもたらし、近年は、約 30 年前と比較して豪雨の発生回数が顕著に増加しています。
- ・区域の南部から西部にかけては、浅い海を干拓してきた低地が広がり、津波や液状化の被害とともに、洪水や高潮による浸水被害が懸念されます。

課 題

自分で自分や家族を守る「自助」、地域で区民や事業者が助け合う「共助」、行政が区民や事業者を救助・支援する「公助」の理念のもと、災害に強いまちづくりを進めていく必要があります。

図 2.8 津波による浸水範囲



南海トラフ巨大地震の被害想定
出典）あなたの街の津波ハザードマップより作成

3 南区の魅力と地域のつながり

- ・南区には、見晴台遺跡をはじめとした遺跡が数多く存在し、笠覆寺や富部神社など歴史ある神社仏閣や旧東海道の笠寺一里塚といった史跡が残る歴史ある街です。（図 2.9）
- ・桜の棒の手や本地まつり、猩々など古くから南区に伝わる伝統文化が今も受け継がれています。
- ・一方で、地域の魅力を知らない区民の割合が高くなっています。
- ・南区の町内会加入率は、全市平均を上回っているものの、減少が続いており、地域社会におけるコミュニティ機能の低下が懸念されています。
- ・近年、外国人住民が増加しており、国籍や民族をはじめ多様な背景を持つ区民が地域で暮らしています。

図 2.9 笠覆寺（笠寺観音）



課 題

- ・南区の史跡や伝統文化などに気軽に親しむことができ、区民が地域への誇りと愛着をもてるようなまちづくりを進める必要があります。
- ・世代や文化に関係なく、誰もが参加し活躍できる地域コミュニティづくりを進め、地域で支え合いながら安心・快適に生活できる地域づくりが必要です。

第3 区民ニーズ

ひまわりビジョン 2023 の策定にあたり区民ニーズを把握するため、平成 30 年 7 月に、18 歳以上の区民 1,000 人を対象とした区民アンケートを実施し、362 人からご回答をいただきました（回答率 36.2%）。

アンケートの中で、日常生活で特に課題だと感じているものを二つおたずねしました。最も多くの方が選んだ課題は「大雨や地震などの災害に対する備え」で、71.3%の方が特に課題だと感じているという結果となりました。次いで、「治安の向上（防犯）」（28.4%）、「高齢者支援」（24.0%）、「交通事故防止、交通マナーの向上」（19.3%）を選んだ方が多くなっています。（図 2.10）

図 2.10 あなたが日常生活で特に課題だと感じているものはどれですか。
（○は 2 つまで）

